18 花　　火

夏の風物詩の花火は、イギリスには無縁のものと思っていた。夜の 11 時になっても完全には暗くならないのだから、花火をやってもつまらない。８月も終わりが近づくころ、ようやく少し夜が暗くなってきて、近所の子どもが花火を始めた。それも、夜の 10 時を過ぎてである。そんなことで、多少は、花火もやるのかと、その時は思っていた。町に中国花火を扱う建物があるのにも、これでもうかるのだろうかと、余計なことを心配していた。しかし、花火は、夏のものとは限らなかったのだ。

11 月１日は、ハロウィン。日本人にはなじみのない行事で、カボチャをくり抜くことぐらいしか知らなかったが、どうやらヨーロッパの人々にとっては、たいへんに伝統的な行事らしい。フランスで、紀元前１世紀の暦の実物が発見され、当時の人々が、どのような暦の観念をもっていたか、明らかになってきた。太陰暦で、季節は陽と陰に分かれ、それぞれ吉凶があり、５月１日と８月１日は、祭りの日。５月１日からは、牧場に家畜が放たれ、陽の季節が始まり、８月１日は収穫を祈願する日らしい。この暦には記されていなかったようだが、ケルトの伝統的な暦では、ほかに 11 月１日と、２月１日が祭りの日にあたるという。11 月１日は、祖先の霊が戻る日で、ほとんど日本の彼岸だ。５月１日は、メーデーの起源だそうである。

このように、キリスト教の国、イギリスでも、実はキリスト教以前のしきたりが、かなり残っているようだ。シェフィールドに近いダービシャーでは、夏になるとあちこちで井戸を飾る行事が行われる。ウェル・ドレッシングというので、うまく着飾るという意味かと思い、仮装行列でもあるのかと思ったら、ウェルは井戸の意味だった。水の神を祭る行事は、もちろんキリスト教のものではなく、鉄器時代からの伝統で、鉄器時代には、さまざまな金属工芸品や、時には人までも、川や湿地にささげられていた。

話が少しそれてきたのでもとにもどすが、11 月１日のハロウィンを過ぎたころから、夜が少し騒がしくなってきた。最初は、治安の悪いイギリスのことだから、何か悪いことでもやっているのだろうかと思ったが、しだいにそれが花

火であるとわかってきた。園芸雑誌に、これから焚き火（ボンファイア）の季節になるから、焚き火をするときには、木の葉のなかに隠れているハリネズミを焼いてしまわないようにという注意がのっていたが、この焚き火は、どうやら単なる落ち葉の始末ではないらしい。テレビを見ていると、ついに花火で２人の死者がでたという。ひとりは学校の校長先生で、生徒のために花火の準備をしていて、みんなの見ている前で火だるまになり、亡くなってしまったらしい。去年は 1000 件以上の負傷者が出ているという。

行きつけのパブで、11 月５日の夜８時から、ボンファイアをやるという予告があったので、もうかなり寒くなっていたが、厚着をして出かけてみた。雨と風が強く、本当に寒い。気温は 10 度を割っている。まずは、パブのなかにはいってビールを注文。やはりいつもより人が多く、ビールを入れてくれるお姉さんも見かけない顔だ。焚き火の場所はパブの裏。子どももたくさん集まって、廃材や木の枝を燃やしている。外にもテーブルがあって、臨時のビールや食べ物の売場もあるが、雨では座る人も少ない。舞台裏をのぞきこむと、ハンバーガーがかなり売れ残っているようだ。ことしは天気の運が悪かったみたいだ。

この焚き火は、日本の彼岸の送り火のようなものなのだろうか。ハロウィンで魂が戻ってきたのを送るには、ちょうどいい時期だ。残念ながら、まだ真相は確認できないでいる。

1996　新納泉　　著作権フリー